

# 金子文子『何が私をかうさせたか』のルソー受容の可能性

安元隆子

**Takako YASUMOTO.** The possibility of Rousseau, Jean- Jacques's influence in *Naniga Watashi wo Kousasetaka* by Kaneko Fumiko. *Studies in International Relations* Vol.40, No.2. February 2020. pp.15-24.

This paper focussed on the possibility of Rousseau, Jean- Jacques's influence in *Naniga Watashi wo Kousasetaka* by Kaneko Fumiko. I considered these topics. The exposure of her stealing, sexual desire and admiration for the opposite sex, interest in nature, approval of children's independence, criticism of the educational system and how to write both her and Rousseau's autobiographies. Kaneko Fumiko mentioned Rousseau, Jean- Jacques only once in her autobiography. However, I thought Rousseau, Jean-Jacques's influence on Kaneko Fumiko was much greater than she revealed.

## 〔はじめに〕

金子文子(1903-1926)は1923年の関東大震災の際、同じ虚無主義者であり、不逞社で共に活動、同棲していた朴烈と共に保護拘束され、治安警察法違反容疑で起訴された。予審の後に爆発物取締罰則違反容疑で追起訴され、1925年、刑法第73条(大逆罪)にあたるとして、大審院管轄事件となる。金子文子は転向を拒否し、翌1926年、大審院は朴・金子に死刑判決を下す。約一カ月後「恩赦」により無期懲役になるも金子文子は獄中で縊死を遂げた。享年23歳であった。

金子文子は第12回尋問調書の中で次のように語っている<sup>1</sup>。「総べての人間は完全に平等であり、従ってすべての人間は人間であるといふ、只一つの資格に依つて人間としての生活の権利を完全に、且つ平等に享受すべき筈のものであると信じて居ります。」——このような思想を持った文子にとって、「神聖不可侵の権威」として当時の日本に君臨する天皇は「空虚なる一塊の肉の塊」、「木偶」であり、「少数特権階級者が私腹を肥やす目的の下」「一般民衆を欺瞞するために操っている一個の操り人形である愚かな傀儡」に過ぎないのであった。そして、「神国とは少数特権階級の私

利を貪るために仮設した内容の空虚な機関にすぎない」こと、「かの忠君愛国なる思想は、実は彼らが私利を貪るための方便として美しい形容詞をもって包んだところの己の利益のために他人の生命を犠牲にする一つの残忍なる欲望に過ぎない」ことを指摘した。つまり、日本において人間の絶対平等を阻むものの究極に位置しているのが日本の天皇制であるとし、そのからくりを暴露したのである。

このような思想を持った獄中の金子文子に予審判事は「過去の経歴について何か書いて見せろ」と命じた。その命に従って文子が執筆した原稿を不逞社の同志・栗原一夫がまとめ、1931年7月に春秋社より刊行されたものが『何が私をかうさせたか』である<sup>2</sup>。李愛順氏が指摘するように<sup>3</sup>、「ぎりぎりのところで、自分が何故天皇に屈服しないかを自問した時、最後の最後に残ったのが、知識などでなく、自らこれまでの人生そのものであった」と考えられる。『何が私をかうさせたか』は、金子文子が「私」自身を探求し、解明するために執筆したものであったといえるだろう。

『何が私をかうさせたか』には、性的にだらしなく、娘を追い出して性行為にふける父母の姿を垣間見る文子や、文子を女郎屋に売ろうとした母

など、両親の愛に恵まれていたとは言い難い幼少期の文子が描かれている。そして、無籍者ゆえ教育を受けることができない悲哀が綴られる。しかし、この疎外は、国家が与えるはずの日本国民としての集団的アイデンティティの代わりに、「個人」として生き、「外部」の人間として国家をみつめる機会を文子に与えたと思われる。9歳から約7年間の朝鮮在住時代、養女の立場から女中に格下げされ虐待を受けた文子は、日本の植民地となり虐げられた朝鮮人の姿を心に留め、彼らの思いに共感している。また、日本や日本人の実態を外部からのまなざしでみつめることにより、その暴力性と差別構造を知ることができたのである。朝鮮からの帰国後は、性の目覚めを体験するも男に踏みにじられ、学問を修めて経済的に自立することを目指して上京、苦学する。そこで資本主義社会の苛酷な現実を知り、社会主義思想と出会うが、金子が接した社会主義者たちの世俗的な実態を知り幻滅、訣別。そして、他人の価値基準に合わせて生きるのではなく、「私自身」を生きることを決意する。無政府主義や虚無思想に傾倒し、同じ思想を持った朴烈の反逆気分が漲る詩を読み、交際、同棲を始めたところでこの書は終わっている。

このような『何が私をかうさせたか』は、これまで金子文子の思想形成過程を知るため、または、伝記的事項を補うための補助資料として読まれてきた感が強い。しかし、この書を独立した文学作品として見做した時、その表現からは裁判記録とは異なる、様々な相が立ち現れてくる。本論は、その諸相のうち、ジャン＝ジャック・ルソー受容の可能性について検証するものである。

### 〔日本のルソー受容〕

日本の明治期の民権運動に、フランスの思想家ジャン＝ジャック・ルソー (Rousseau, Jean-Jacques 1712～1770) の『民約論』が大きな役割を果たしたことは周知の事実であろう。このルソーが書いた、赤裸々に自己を探求した自伝『告白』もまた反響を呼んだ。日本でも、ルソーの生誕200年にあたる1912(大正元)年に『告白』

全訳が石川戯庵訳『ルッソオ懺悔録』(前、後編)として東京・大日本図書株式会社より刊行された。そして、1915(大正4)年には生田長江・大杉栄訳の『懺悔録』(上・下)が新潮社より刊行されていることも、日本におけるルソーへの関心の高さを裏付けるだろう。ルソー及びその『告白』に心酔する日本人の姿は次の評言からも明らかになる。

政治、道徳、文芸、教育、凡そ近代の文明、近代の思想と云ふもの、何れとしてルッソオの感化を経ないものがあるろうか(中略)人間の文明に一大飛躍を与へた偉大なる力は実はルッソオの天才に帰すると云ふも敢えて過言ではなからう

(『やまと新聞』、大正元年10月1日)

明治初年に於けるルッソオ思想が改新の血を湧かしたること幾ばくであつたろう。(中略)其の民約論其のエミールに比して更に大いなるルッソオの著書は其の懺悔である。(中略)民約論やエミールの学説は滅びてもルッソオの人格は滅びない

(『東京朝日新聞』、大正元年10月5日)

そして、小西嘉幸がこの『告白』は島崎藤村の『新生』をはじめとして「明治中期以降の自然主義的告白文学に決定的な影響を与えた」とも指摘するように<sup>4</sup>、日本の近代は様々なジャンルでルソーから多大な影響を受けている。金子文子もまたルソーの思想を受容した一人ではないかと思われる。

### 〔金子文子とルソー〕

以下、金子文子の『何が私をかうさせたか』がルソー『告白』と重なると考えられる箇所を比較検討する。

#### 1. 盗みの告白

実は、金子文子が『何が私をかうさせたか』の中で、ルソーに言及しているのは次の一か所のみである。

私は、つひ嘘も云ひ、影日和もし、最後には到頭、盗みまでもするやうになつた。「懺

悔録」の中でルッソオが告白して居るやうに、私も亦、散々いぢめられた揚句、いぢけにいぢけて、果ては到頭盗みをするやうにさへなつたのだ。(p.180)

文子がここで言及しているのは、ルソー『告白』の次の部分であろう<sup>5</sup>。

こうして、わたしはだまって物をほしがることを覚え、隠しだてをし、人まえをつくり、うそをつき、ついに盗むことまで覚えた。(中略)<sup>6</sup> 盗むということが思っていたほど恐ろしくないことを知り、まもなく自分の技術をうまく利用することになったので、わたしのほしがる物を手のとどくところへ置くのは、危いという事になった。(中略) いまだに思い出してぞっとするとともに吹き出しもするのは、あのひどい目にあつたリンゴぬすみの一件だ。

このように、ルソーは少年の日の窃盗を赤裸々に告白した。この点について桑原武夫は次のように指摘している<sup>7</sup>。「自己を告白するとは、世間のよろこび、おもしろがることのみを告げることではない。誰ひとり弁護してくれそうもない悪事の告白、そこにこそ自己の個別性をふかく信じる人間の勇気の試金石がある」。たとえ悪事を行っていても、それを含めて屹立するのが「私」であり、それは他者と代替不可能なゆるぎない「私」であるとするルソー。金子文子はこの精神をルソーから学んだのではないだろうか。虐待が続く朝鮮半島での生活の中で、祖母の怒りを少しでもやわらげるために文子は次のような盗みを行った事実を告白するのである。

市場にやられる日には私は、先づ、家の者の気づかない時を見計らつて、そつと押入れの小遣銭の函の中から銅貨を七八ツ盗み出した。そしてそれを帯の間へまるめ込むで置き、帰つたときにはそれを、そのまゝ、釣銭の中に加へて祖母の前に出すのであつた。(p.184)

米の上の字を私は凝乎と贖めた。そして祖母の書いた字の真似を指先でやつて見た。何うやら似せ字がかけると云ふ自信がついた時、私は手早くその米を五升罎に掬つて袋に

入れた。そして、袋を俵の陰に隠しておいて米の面をもと通りに均らした。それから豫ねて稽古して置いた「壽」の字を祖母の手つきに似せて指で書きつけた。(p.185)

こうした「盗み」という過去の汚点・恥部をさらけ出し、人々が表現したがる「邪悪な行為や卑しい行為」を記述する姿勢から、金子文子が自己の人生そのものを凝視し、誠実に自己に向き合い、自分自身を解明しようとしていることが読み取れる。同時に文子がこうした行動をとらざるを得ないほど、祖母たちの虐待がひどいものであつたことを裏付けて、この書に描かれた告白全体の真実を読者に印象付ける結果となっている。

## 2. 性の告白

『告白』の新しさを示すものとして繰り返し取り上げられるのは「性の告白」である。例えばそれは、ランベルシェ嬢から受けた「尻打ち」に混じっていた性の早熟な官能や、ヴェルソン嬢とゴトン嬢という二人の全く異質な女性への恋愛感情、そして、同性愛者に言い寄られ、身の危険を感じる情景(同性愛者の欲望の対象となつたルソーの困惑が飛び散つた精液のなまなましい描写とともに描かれている)などに顕著である。

金子文子も『何が私をかうさせたか』の中で、異性に対する憧れや己の肉体に潜む本能的な性欲を凝視している。

私の生命のうちには何か知ら異性を求むるものが芽生えて居たのに相違ない。(p.225)

何か理由のわからぬ力に引きずられる心地で叔父の寺へばかりへばりついて居た。(p.239)

無理に目覚めさせられた若さの寂しさとても云はうか、私の心の何処かしらに充たされない寂しさがあつた。それが何であるのか解らないながらも、而も何かしら求めたい気が私のうちに絶えず燃えて居るのであつた。(p.243)

私はその時多分に此の青年の目的とするものを感じて居た。が、思ひきつてそれをねとばすことが出来なかつた。何故なら、私にもその頃何かしらわけのわからぬものへの

憧れが渦巻いて居たからだつた。(p.245)

四つ五つの時分から、だらしのない性生活の教育をうけて来た私である。不自然な性の目覚めに誘き出された私である。その私が、もう十六にも七にもなつて、自分にもわからぬ或る不思議な力にひかれて、何ものかを憧れもとめた事に、何か重大な罪悪でも秘んで居たと、父や叔父は云ふのであるか、(p.265)

このように、過去の記憶の断片を一つ一つ辿っていくことで、そこには「何か理由のわからぬ力」「或る不思議な力」と表現された内なる「自然」が存在していたと書いている。これは女性である金子文子の中にも確かに存在していた性欲や異性へのあこがれを表現している部分である。貞淑で慎み深い女性が求められていた時代、このような女性の中に存在する異性に対する憧れや、肉体に潜む本能的な性欲を女性自身が凝視していることは注目に値する。こうした部分にも、金子文子がルソー受容を契機に醸成された時代の雰囲気感化された可能性があると思われる。

さらに、ここで付け加えたいのは、こうした内なる自己を凝視する作業は、これまで過去の出来事の中で意味づけがなされず、または無意識のうちに表出することを避けていた出来事をも意識の上に現出させる、ということである。次はこうした作業の中から生まれたと思われる部分である。

私も立ち上つて外を見ようとした。と、その途端！

私はもう眼がくら／＼と暗むで居た。

あゝ何と云ふ悪魔で彼はあつたらう。振り払ひ、振り払ひ、矢を負つた獣物のやうに、私は夢中になつて狭い急な梯子段を駆けおりた。(中略)

この事を私は、今までついぞ一度も口外したことはなかつた。けれど、私の存在がもう何時この世から消え去るかも知れない今となつては、隠して置く必要もない。私の生活や思想や性格の上に大きな影響を及ぼしたであらうと思はれる何ものをも私は今、白日のうちにさらけ出して置かねばならぬ。それは常に法官が私を見る一つの材料として必要であるより、もつと大きな真理の闡明のために絶

対必要なことだと思ふからである。(p.238)

文子自身の人違いにより、一度顔を併せただけの男に襲われたこの経験は裁判記録にも叙述されていない。これまで決して口にすることなく、無意識下に葬られていたこの出来事は、内なる自然——異性への憧れや性欲を包み隠さず明らかにする作業を通じて、初めて文子の意識に立ち上ってきたことなのであろう。

『何が私をかうさせたか』によれば、金子文子は朴烈と会おう前、何人かの男性と性関係を結ぶが、男のふがいなさや裏切りにより文子の思いは実らず、男たちは去っていく。しかし、彼らは金子文子が自ら選んだ男性たちであった。だが、この場合は金子文子の意思が無視され強制的に性関係が結ばれたことになる。「私自身」を生きようとした文子にとって、この体験は思い出したくない、消したい過去だったと思われるが、それを「大きな真理の闡明」のためにここで初めて公表するのである。これは、金子文子が自己を探求するためにすべてを告白しようとする行為の中から生まれた想定外のできごとだったのにちがいない。

### 3. 子どもの尊重と学校教育への批判

ルソーが『エミール』<sup>8</sup>において、当時のフランス特権階級の教育の歪みを批判し、児童の本性を尊重して自然な成長を促すことが教育の根本であると説いたことは周知の事実であらう。

ルソー以前、子どもは「小さな大人」とみなされ、大人と子どもの明確な区別はなかったが、ルソーは子どもが大人とは異なる独自の存在であることを指摘した。

この金子文子の『何が私をかうさせたか』も自らの経験を元に、子どもの存在を軽視した世の中の自己中心的な親の在り方を批判し、子どもの独立した価値を認めるべきだとする教育観が表れている。

あゝ、出来るなら私は、聲をかぎりに世の中に向つて叫びたい。殊に世の父や母に呪ひの声をあげたい。

「あなた方は本当に子供を愛して居るのですか。あなた方の愛は、本能的な母性愛とやらのつゞく間のことで、あとはすつかり御自分

達の利益のためにのみ子供を愛するやうな風を装つて居るのではないですか」と。(p.80)

——子供をして自分の行為の責任を自分のみに負はせよ。自分の行為を他人に誓はせるな。それは子供から責任感を奪ふことだ。卑屈にする事だ。心にも行為にも裏と表とを教へる事だ。誰だつて自分の行為を他に約束すべきではない。自分の行為の主体を、監視人に預けるべきではない。自分の行為の主体は完全に自分自身である事を人間は自覚すべきである。さうする事によつてこそ、初めて、人は誰をも偽らぬ、誰にも怯えぬ、真に確固とした、自律的な、責任のある行為を生むことが出来るやうになるのだ—— (p.114-115)

——大人は自分の見栄や骨惜しみのために子供を犠牲にして居ます。大人は、ことに母親は、子供を危険から護り、子供の天分をのばしてやるのがその職分です。子供の自由を奪ひ、子供の人格を奪ふのは恐ろしい罪悪です。子供を自由に遊ばせなさい。自由の天地に遊ぶ事は自然が子供に与へた唯一の特権です。さうされてこそ、子供は伸び／＼と人間らしい人間にまで成長するのです——と。(p.143-144)

これらは子どもを親の所有物とせず、また、親の感情の支配下に置くのではなく、子どもの存在自体を自立したものと見做し、真に子どもの成長を見守るべきだという文子の実体験から生まれた主張を述べた部分である。人生それぞれの時代の独自の価値を認め「子ども」を発見したルソーの考え方と相似形を成しているといえるだろう。また、

私が無籍者だつたのは私の罪であらうか。私が無籍者であつたのは私の知つて居たことではない。それは父と母とのみが知つて居る事であり、その責任も二人のみが持つべきである。なのに、学校は私にその門を閉ぢた。他人は私を蔑むだ。肉親の祖母さへがそのために私を蔑み脅かした。

私は何も知らなかつたのだ。私の知つて居たのは、自分は生まれた、そして生きて居ると云ふことだけであつた。(p.106)

この部分には、両親が無籍者を誕生させたのであって、それは決して自分の過誤ではないこと、そして、この無籍者の立場によって教育の機会を奪われたことへの怒りと怨念が綴られている。このように、教育に関して文子が自己の考えを言明している部分があり、自己の体験をもとに子どもの在り方を凝視し、提言をしている点もルソーと重なる。

例えば、明治時代になり、教育令が發布され、どんな田舎にも小学校が建てられ、七歳になれば特別な事情がない限り、義務教育によって人々は文明の恩恵を受けることができたのに、文明が生み出した「戸籍」というもう一つの制度から除外されたことにより、金子文子は教育を受けることができなかつた。普通の小学校に通学を許されても、貧困のゆえにノートと鉛筆が買えるまで、学校を休まねばならなかつたことも記されている。そして、別の学校では、授業を受けることはできたが、出席確認の際に名前を呼ばれない。終業式では他の子供たちとは異なるうすっぺらな修了証書を渡されるのである。母の同棲相手・小林の郷里である小袖集落から鴨沢の学校に通っていた時も、終業式に出席し免状をもらうことが許されたが、暗に慣習となっていた酒を教師に差し入れることを要求される。父方の祖母に連れられ過ごした朝鮮時代も、農業の実習を行い、農業のすばらしさと農民への敬意を説く教師と出会うが、その教師は文子に祖母たちの横暴にも抵抗することなくやり過ごすことを勧め、また、農業教育に反対する祖母への不満と怒りを逆に文子にぶつける。

このように、学校教育は文子にとって知識を得、生き方を模索する場、または、友達との交情の場というよりも、近代日本の教育制度の歪みを実感させる場であつた。こうした学校教育の実態に対するアンチテーゼがこの『何が私をかうさせたか』には描かれている。それはルソーが『エミール』において主張した子ども時代の発見と、子どもへの教育の在り方を提唱した部分と通底している。

#### 4. 自然について

桑原武夫はルソーの『告白』に表された自然について、当時、ヨーロッパ文学においてはこのよ

うな美しい自然描写はなかったとし、次のように書いている<sup>9</sup>。

自然はこの思想家にとって、外界にして内界の秩序でもあった。自然とは、人がみな生まれながらにして持っている、あやまたぬ良心にほかならなかったのだ。その良心の体現者と自負する孤独なルソーが、風景のなかに一個の「自然人」として立つとき、自然はかならず精彩をおびるのである。

このように、ルソーにとって自然とは、単なる外界、物的自然界ではなく、「人間の魂のほんらいの住み家」であったと考えられるという。そして、内界と外界が一致した魂の反映としての外界を描写した場面として、次のような部分を挙げている<sup>10</sup>。

対岸の道にそって、庭が段々になってつづいていた。その日はたいへん暑かった。夕方は気持がよかった。露がしおれた草をうるおし、風はなく、静かな夜。大気はさわやかだが、つめたくはない。すでに沈んだ太陽は空に赤いもやをのこし、その反映が水面をバラ色にそめていた。(中略) ちょうどわたしの真上に夜鶯が一羽いて、その歌をききながら眠りに落ちた。眠りのところよさ、それにもまさる目ざめのところよさ。

この様な内界と外界が一致した時の魂の反映としての自然が実は『何が私をかうさせたか』の中にも登場する。母の同棲相手である小林の生まれ故郷、山梨県丹波山村の小袖に移り住んだ頃を振り返り、「私が本当に自然に親しむだのはこの頃である。おかげで私は村の生活がどんなに理想的で、どんなに健康で、どんなに自然であるかと云ふことを今日も感じて居る。」(p.65)と回想している。また、朝鮮での生活の中でも、自然の中でこそ金子文子は自由な自分を見出すことができると認識している。

格好のいゝ芙蓉峰が遥か彼方に聳えて居る。その裾を繞つて東から西へと、秋の太陽の光線を反射させて銀色に光る白川が、白絹を晒したやうにゆつたりと流れて居る。その砂原を荷を負うた驢馬が懶さうに通つて居る。山裾には木の間をすかして鮮人部落の低い藁屋

根が、ちらほらと見える。霞の中にぼかされた静かな村だ。南画に見るやうな景色である。

それを凝乎と眺めて居ると、初めて私は、自分がほんとに生まれて生きて居るやうな気がする。(p.151)

朝鮮の自然賛美はこれだけではない。それは朝鮮にいる時、虐待された文子の心を癒し、蘇生させるものとしてあった。こうした自然の治癒力とそれへの同化は文子に死をも思い留まらせる。

私は今一度あたりを見まはした。何と美しい自然であらう。私は今一度耳をすました。何と云ふ平和な静かさだらう。

「あゝ、もうお別れだ！山にも、木にも、石にも、花にも、動物にも、此の蟬の聲にも、一切のものに……」

さう思つた刹那、急に私は悲しくなつた。

祖母や叔母の無情や冷酷からは脱れられる。けれど、けれど、世にはまだ愛すべきものが無数に在る。美しいものが無数に在る。私の住む世界も祖母や叔母の家ばかりとは限らない。世界は広い。(p.168)

朝鮮の自然は死を志向する金子文子を生きる方向に転換させた。ルソーの説く人間の「自然への回帰」が外界の自然とも深い関わりがあったように、文子の見た朝鮮の自然も文子の内界を反映し、また、魂を導くものであったといえるだろう。

## 5. 「私」の探究

ルソーは『告白』を記す理由をこのように述べている<sup>11</sup>。

わたしの告白の本来の目的は、生涯のあらゆる境遇をつうじて、わたしの内部を正確に知ってもらうことである。わたしが約束したのは魂の歴史であり、それを忠実に書くには、ほかの覚書はなにも必要でない。これまでわたしがやったように、ただ自我の内部にもどってゆけばそれでいいのだ。

つまり、自我の内部に戻り、正確にそれを描くこと、それは「魂の歴史」を辿ることでもあった。「率直に、あらわに全存在をしめすという近代的告白は、ルソーその人をもって開祖とするのである。」とは桑原武夫の言葉であるが<sup>12</sup>、それは、「一

市民ルソーの魂のほうが王のそれより良質であるという自負」がルソーにあったと見做されるからだという。神によっても、宮廷によっても、その他の何ものによっても権威づけられぬ、ただ自分ひとりが信じる自分の価値。そして、自分はほかの人間とは異なるという個別性の認識を基に「私」の解明のために自叙伝を執筆するルソーの姿勢と、「私は、他の何ものでもない、私自身を生きる」という金子文子が至りついた思想は共鳴している。

フィリップ・ルジュンヌは『フランスの自伝』<sup>13</sup>の中で、自伝には「自分の生涯をあらためて把握し理解しようという誠実な企図」の存在が必要としている。そして、「自伝は、ほとんどつねに一人称で書かれた、語り手と主人公が同一の物語」なのであり、「作品のなかの『わたし』は作者のことなのだ。しかし、テキストの内部にはそれを証明するようなものは何もなく、自伝というのは読者の信頼にもとづくジャンル」であるとも指摘している。更に、この本を訳出した小倉孝誠によれば<sup>14</sup>、自伝は序文、あるいは機能的に序文と同じ位置をしめる頁を含むことがとりわけ多いジャンルであるという。そして、そこには自伝を執筆するに至った動機付けや経緯が述べられ、どのようにして自己の生涯を語っていくかという形式上の問題、さらには、他の自伝作家に対する評価や価値判断を通して自分の試みを定義しようとするものであると指摘している。そして、このように自分の生涯を語る際に、作家が読者に対して行う正当化の身振りを、ルジュンヌは「自伝契約」と名づけたが、同時にこれは、ヨーロッパの自伝と日本の自伝を隔てる重要な違いの一つであり、我が国の自伝作家たちがこの種の序文をつけることはほとんどなく、読者に向かって自伝行為を弁明する必要性をほとんど感じていないとも指摘する。新井白石や大岡昇平といった稀な例をのぞけば、前置きなしに、いきなり自分の生涯を回想し始めるという。日本人にとって、それは必ずしも文学的伝統との対峙や競合を要請する営みではなく、むしろ極めて自然な行為に他ならず、不特定多数の読者に対して自己を語ること、佐伯彰一の言葉を借りるならば、「私語り」は日本にお

いては文化的・社会的な抵抗に出会うことがほとんどない、と述べている。つまり、日本の自伝と比較してヨーロッパのそれは、自己探求の誠実な企図を序文等で初めに記す傾向があるということを描しているのである。確かに、ルソーの『告白』の冒頭には<sup>15</sup>、

これがわたしのしたこと、わたしの考えたこと、わたしのありのままの姿です。よいこともわるいことも、おなじように率直にいいました。何一つわるいことをかくさず、よいことを加えもしなかった。

とあり、この見解を裏付けている。

では、金子文子の『何が私をかうさせたか』ではどうか。冒頭には「添削されるに就いての私の希望」とあり、

記録の方は皆事実に立つて居る。そして事実である処に生命を求めたい。だから、何処までも『事実の記録』として見、扱つて欲しい。(p. 5)

とある。また、「手記の初めに」には、

私はこれを私の同志に贈る。一つには私についてもつと深く知つてもらひ度いからであるし、一つには、同志にしてもし有用だと考へるならこれを本にして出版してほしいと思つたからである。

私として何よりも多く、世の親たちにこれを読むでもらひ度い。いや、親たちばかりではない社会をよくしようとして居られる教育家にも、政治家にも、社会思想家にも、凡ての人に読むでもらひ度いと思ふのである。(p.8-9)

とあることから、序文に執筆意図を記した西洋型に属するといえよう。

では、最後にこうした執筆方法についてルソーと金子文子を比べてみたい。ルソーは「ヌーシャテル草稿の序文」の中で次のように書いている<sup>16</sup>。

私が書こうとしているのは出来事そのものの物語ではなく、むしろそれが起こった際の私の魂の状態の物語なのだ。

そして、さらに次のようにも述べている。

受けた印象の記憶と現在の感情に身を任せ

ながら、私の魂の状態を二重に描こう。つまり、出来事が起こった時の魂の状態と、その出来事を語った時の魂の状態を描こうというのである。

ルソーが説明しているように、『告白』には執筆時の現在と、物語の中の時間という二重の時間が存在している。例えば、音楽の趣味を叔母から教えられたことを記す際、次のように書いている<sup>17</sup>。

叔母の歌の魅力は非常なものだったので、そのうたのいくつものがいつまでも記憶に残ったばかりでなく、もう記憶力なくなった今日、子供のときからすっかり忘れていたようなものまで、老いゆくとともに新しくよみがえってきて、言葉にはあらわせぬ魅力をおぼえるのだ。(中略)わたしのやうな老いぼれが、ときどきこんな歌の節々をもかすれた、ふるえ声で口ずさんで、思わず子供のように涙を流していることがあるのを、誰が知っていよう。

実は金子文子の『何が私をかうさせたか』も、この二重の時間を内包することによって成立している。例えば、次の部分に顕著である。

こんな風だから部落民が非常に粗末な食事しかとれないのが当然で、御飯は私が今食べさせられて居るやうに挽割麦であるが、実はその監獄飯よりも劣つて居た。と云ふのは監獄のは謂はゆる四分六飯とかで南京米が四割入つて居るやうだが、部落には白い米などはただの一粒もなかつたからである。もつともその代りには、監獄の御飯のやうに虫だの石だの藁屑だのは入れてなかつた。野菜の煮物は監獄と同じだと云つていゝだらう。何故なら、どちらもそれを煮る時一塊の砂糖すら入れられはしないのだから。部落で食べる魚と云へば飛び上る程鹽辛い鮭、たゞそれだけであつた。それも一ヶ月に一度位しか食べられないのだつた。(p.64)

このように、母の同棲相手であつたで小林の故郷、山村の小袖での貧困生活を述べる際、同時に文子の執筆時の現在を示す監獄の食事のことが突然挿入されている。また、本論〔金子文子とルソー〕

2. 性の告白の部分で述べた通り、文子の人違いにより、よく知らぬ男に襲われた経験を語った部分も同じことが言えるだろう。このような意識下に追い込めた出来事をなぜ明らかにするのか、現在の魂の状態を説明している。こうした意識の往復運動は、過去の出来事を過去のものとして描くのではなく、その出来事が起きた時の魂の状態とそれを語る時の魂の状態を共に描くことで、複線的な時間構造を自伝の中に現出させている。そして、過去の出来事を現在の著者から眼差した結果、新たな意味付けがなされるのである。この点でも、金子文子とルソーの書き方には相似が見られるとあってよいだろう。

### 〔終わりに〕

金子文子の『何が私をかうさせたか』は、人間の絶対平等をめざし天皇制を否定した文子が、自己を探求し、その思想形成過程を綴った書である。書中、ジャン＝ジャック・ルソーについて明らかに触れているのは一箇所にすぎないが、悪事や性の暴露、子どもを独立した存在として扱うという主張と、学校教育への批判、再生につながる「自然」の持つ力、過去と執筆時の視点を併存した執筆方法などが相似している点から、論者はルソー受容の可能性を指摘できると考える。

幼少時、無籍者であることから十分に学校に通うことができない文子であったが、『何が私をかうさせた』を読めば文子の読書欲は旺盛で、『少年世界』や『婦女界』など手にすることが出来た雑誌や新聞を貪欲に読んでいたことがわかる。また、上京後、新山初代<sup>18</sup>がベルグソンやスペンサー、ヘーゲルなどの思想一般を、もしくは少なくともその名を知らせてくれたとあり、その中でも一番多く文子の思想を導いたものはスティルネル、アルツィバーセフ、ニイチェなどの虚無思想であったと書いている。また、市ヶ谷刑務所に収監された後、真田幸丸の著『信に生きた人』を読んだことや<sup>19</sup>、立松判事あて書状(1925年5月21日付)には、「今、朝飯前の仕事に、二三日前差し入れられた、あるロシア作家の論文集を開けてみたら」という言葉もある。そして、石川啄木



歌集の差し入れを栗原一男に依頼し、その読後の詠歌を編んだと考えられる獄中歌集には、「石川啄木」「大杉栄の自伝」「ホイットマンの詩集」などの思想家や文学者の名前が散見し、「冬の夜の電燈暗き牢獄にロメオとジュリエットの恋物語読む」という歌もある。これらのことから獄中であっても幅広い視野で様々な分野の書物を読んでいたことがわかる。彼女の旺盛な読書欲、知識欲から推察するに、世界的に反響を呼んだルソーの『告白』を読んだ可能性、またはその世界に触れた可能性は否定できない。少なくとも、時代的雰囲気として醸成されたルソー熱に金子文子も感化されていたことは事実といえるであろう。

本論〔はじめに〕で書いたように、『何が私をかうさせたか』を金子文子の伝記的事項の補充や思想形成過程の補助資料としてだけではなく、作品として読んだ時、同時代の様々な知によって複合的に形成された金子文子の世界が立ち現れてくる。本論はその可能性を秘めた存在として金子文子を捉える試みである。

## 付記

本論は科学研究費補助金、基盤研究 (C)、2019～2021年度 研究課題／領域番号 19K00533 研究テーマ『『人間の絶対平等』を目指した金子文子の思想と文学の総合的研究』の成果の一部である。

また、比較文学会東京支部大会 (2019年10月19日) において「金子文子のルソー受容の研究」と題して行った研究発表を論文化したものである。

## 注

- 1 『朴烈・金子文子裁判記録』(1977年、黒色戦線社) p.59
- 2 本論での引用は、1972年、黒色戦線社が原本を復刻、刊行した『何が私をかうさせたか』による。引用末尾にページ数を付した。
- 3 李愛順「日本女性と天皇制」、(『女、天皇制、戦争』所収、鈴木裕子、近藤和子編、オリジ

ン出版センター、1990年)、p.82

- 4 小西嘉幸『『懺悔録』の翻訳と日本近代の自伝小説—藤村の『新生』』、(『日仏交感の近代』所収、京都大学出版会、2006年)、p.28
- 5 『告白 上』(桑原武夫訳、岩波書店、1965年) P.49-51。以下『告白』の本文引用は『告白 上、中、下』(桑原武夫訳、岩波書店、1965年)による。
- 6 中略の部分には、盗んだものを市場で売る場面が描かれている。
- 7 注5の下巻「解説」p.312
- 8 1762年5月に刊行された、構想する理想的な教育プランを小説的に描いた教育論『エミール』(Émile ou De l'éducation, 1762)。ルソーは自分を教師として位置付け、架空の孤児「エミール」の育成を通して教育を理論化しようとした。
- 9 注5の下巻 p.308
- 10 注5の上巻 p.241-242
- 11 注5の中巻 p.13
- 12 注5の下巻の「解説」p.301
- 13 『フランスの自伝』フィリップ・ロジェンヌ、小倉孝誠訳、1995年、法政大学出版局 P.20-21
- 14 注13の「訳者あとがき」P.275-276
- 15 注5の上巻 p.10
- 16 注13の p.114,116
- 17 注5の上巻 p.19-20
- 18 新山初代とは、文子が上京後「岩崎おでん屋」に女給として住み込みで働き、正則英語学校の夜学に移った大正11年1,2月頃、夜学で知り合った。主にニヒリズム傾向の思想を共有し、不逞社にも加入した。関東大震災の際、不逞社の同志が順次検束され、新山初代も例外ではなかったが、11月27日危篤状態で獄外に出され、死去。享年22才。
- 19 第7回訊問調書(1924年1月25日)。真田増丸の誤りか。真田増丸(1877-1926)は明治大正時代の僧、社会運動家。大日本仏教済世軍を結成し、労働者への布教活動を行った。

## 主要参考文献

- ・『告白 上・中・下』ルソー、桑原武夫訳、岩波書店、1980年
- ・『ジャン=ジャック・ルソー』マルセル・レーモン、国文社、1990年
- ・『ルソーを学ぶ人のために』桑瀬章二郎編、世界思潮社、2010年
- ・『今こそルソーを読み直す』仲正昌樹、日本放送出版協会、2010年
- ・『ルソー』福田歓一、岩波書店、2012年
- ・『ルソー 透明と障害』ジャン・スタロバンスキー、みすず書房、2015年
- ・『思想 ジャン=ジャック・ルソー問題の現在』2009年11月
- ・『現代思想 総特集 ルソー』青土社、1992年
- ・『フランスの自伝』フィリップ・ルジュンヌ 法政大学出版局 1995年
- ・『自伝のかたち』ウィリアム・C・スペンジマン、法政大学出版会、1991年
- ・『金子文子 自己・天皇制国家・朝鮮』山田昭次、影書房、2004年
- ・『女、天皇制、戦争』鈴木裕子、近藤和子編 1990年、オリジン出版センター
- ・『近代日本の自伝』佐伯彰一、中央公論社、1990年
- ・『自伝文学の世界』佐伯彰一編、朝日出版、1983年
- ・『自伝の世紀』佐伯彰一、講談社、2001年